

戦後の農地改革は、「当事者行政」だから成功したんだと思う

菅野正寿（福島県二本松市東和町）

規制改革推進会議の主導で設置された「農地集積バンク（農地中間管理機構）」は実績低調で、見直しが決まっている。企業参入にこだわる同会議の意向で、地域の話し合いによる「人・農地プラン」を邪魔者扱いした結果だ。2018年から二本松市の農業委員になった菅野さんは、地元旧東和町の町史を最近ひもとく機会があった。そこで確認したのは、戦後の激烈な農地流動化ともいえる農地改革が「同じ村で耕作し、生産と生活を共にしている当事者」だからこそできた、という事実だ。

「耕作断念地」の増加

「せっかく基盤整備をした水田が、セイタカアワダチソウ畑になってしまっている」

「太陽光発電のための急斜面での農地転用はどうしたらいいのか」

2018年夏に二本松市の農業委員・農地利用最適化推進委員となった私は、これまで何度か農地パトロールと転用確

認に歩く機会があり、「農地を守るとはどういうことなのか」と考える場面が多くなった。

ここ福島県二本松市東和町は、阿武隈山系の西側に位置し、標高200mから500mの中山間地域である。1980年代からの牛肉や生糸の輸入自由化に伴い、価格が暴落し、牧草地や桑畑の耕作放棄地が増大していった。さらに、米価の低迷に追い打ちをかけるように起きた東日本大震災・原発事故で、米づくりを断念する農家が増えてしまった。輸入自由



旧東和町は、2005年12月に合併して二本松市の一部となった



昭和26年頃の栗田創業者賞



農林大臣賞に輝いた菅野一家

研究記録



深田ジープ



中野研農会共同作業班 (昭和27~29年)



太田経営同志会

山一 村上三郎



採種した綿羊



ホームスピンの機械風景



昭和27年中央展覧会



昭和27年中央展覧会

『東和町史』には、1950～60年代、農事研究会ほか、むらの自主的な活動が活発だった頃の写真がたくさん載っている。当時はヒツジもたくさん飼われていて、共進会で日本一を獲得したほか、地域ではホームスパンも盛んだった。太田経営同志会の前から2列目左から2人めの賞状をもっているのが父の辰寿

化や原発事故は、農民自らの意志でなされたことではない。いわば外圧により苦渋の決断をしたのであるから、「耕作放棄地」というより「耕作断念地」といえる。

1950年代、むらは活気に満ちあふれていた

私が幼少期だった1960年代、わが家は米、養蚕、野菜、小麦、大豆、酪農、羊などの複合経営であり、味噌、醤油、豆腐、納豆、炭焼きの自給農家であった。生前の父はよく「70年の減反政策（米の生産調整）以前までは、むらにはとても活気があった」と話していた。

『東和町史』をひもといてみると、50年代後半から60年代の東和町には多くの農事研究会（自主的な農業の研究會）が発足していたようだ。父も「太田経営同志会」に参画し、農業簿記コンクールで入賞するなど、当時は民間技術の研修と農業経営の改善が活発に進められていた。東和町は、全国綿羊共進会では日本一、畜力利用による傾斜地経営では農林大臣賞を獲得し、羽山リング団地も成功に至った。『東和町史』には「戦前の束縛からの解放と民主主義の高揚により、戦前には考えられない新しい側面がつきつきに現れ、新しい地域づくりが進展した」時代で、中山間地域の農業はどうあるべきか農民が自ら真剣に考え、住民本位の行政が運営されていたと記されている。

これは戦後の農地改革（1947年～48年頃）の成果であり、「小作人が従来の封建的な地主小作関係から解放されて、独立した農民として一本立ちすることができたことと、同時に高い小作料から解放されて、生活の上からもその分だけ余